
雪景色

べあ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪景色

【Nコード】

N3510D

【作者名】

べあ

【あらすじ】

中3の冬始めてあった隣の中学校の男子文也生徒が忘れられない歩高校になって運命的な出会いをしたが実は文也は・・・?!

第1話

真っ赤に色づいた葉も枯れ始め少しずつ
ゆつくりと冬に近づいてきた11月の始め

中学3年生の冬

みんな受験勉強と必死に格闘中の中
ただ1人

受験なんて関係ないとも言つように
外の灰色の世界を眺めている女子生徒が1人いた・・・

彼女の名前は、

佐古田歩

『こら佐古田！受験生にばーつとしてる時間なんてないぞ！！』

「先生・・・だって、外の景色超綺麗なんだもん・・・」

『受験生に綺麗も何もなし！そんな暇があるなら、帰って勉強でも
しろ！！』

「はいはいはい！
じゃセンサーさよーならー」

わざとらしく大げさに言って

隣にいた男教師から、

怒鳴り声を浴びせさせられながら帰ったのは、いうまでもない……

「あーもー本当サイアク耳超痛いー

彼奴の声デカすぎだし!!」

そんな文句を言いながら霜柱を割っているとき

「痛ッ!!」

後ろから、男の声がした

歩が振り返って見ると後ろには、1人の男が地面にしりもちをついていた

それは、よく見ると隣の中学校の制服を着た黒縁眼鏡の男子生徒

うわ……

転んでるよだっさー

てか、前髪長くてこわー

絶対虐められてるなーこの人

なんて勝手な推測をしながら

歩はもう1度チラッと後ろを振り返った

その時

「あ

目が合った

でもそれ以前に驚いた事が1つ

ええええ?!

眼鏡はずしたら超かつこいい!!!

目を疑うような変身ぶりに歩は固まってしまった

「・・・・・・・・・・」

2人の間に気まずい雰囲気の流れ

歩がその空気に耐え切れずついに話かけてしまった

「だっ・・・・大丈夫ですか・・・・??」

「あ・・・・うん」

男子生徒は、驚いた顔をして歩を見る

「え・・・・アタシ何かおかしい事言った?」

「いついや・・・・別に」

男子生徒は、歩から目を逸らし落ちた鞆を拾ってずれた眼鏡をかけ直した

うわー

人ってこんなに変わるもんなんだなーと
感心しつつ歩は、前を向き直して歩き始めた

「ただいまー」

「あ！

お帰り歩、今ちようどご飯できた所！今日は歩が好きなスパゲティよ」

「本当?! やったあー」

歩には、父親がいない、亡くなったとかそーゆう訳ではなく歩の父親は歩が出来たと知って逃げたのだ歩と歩の母を残して・・・

「歩ー??? お母さんね、歩に話しておく事があるの・・・」

「んー何??」

歩は、スパゲティーをほおばりながら不思議そうな顔をした

「お母さんね？

歩が高校にはいったら、再婚しようと思うの・・・」

「え・・・」

歩は、前々から自分の母に再婚を勧めていたのがいざそうになると少し寂しい気もした

「あつあたしは、良いと思うよ・・・？その人お母さんの事幸せにしてくれるんでしょ？？」

歩は、お母さんに迷惑をかけては駄目だと思い笑顔で言った

「もちろん！時田さんて人なんだけどねーても優しい人なの」

「そっか・・・それなら安心幸せになつてね」

「あと1つ時田さんにはね？歩と同じ年の息子さんがいるの」

それは、さらに歩を驚かせる事になった

「むっむすこ？！」

「それで、歩も時田さんの息子さんも受験生でしょ？

だから、受験に集中してもらう為にあなたが高校生になったら逢わせようと思うの・・・」

歩は、もう声もでなかった

「あ・・・歩？こんな事急に言われても驚くに決まってるわよね・・・」

「あ・・・えと、」

歩は、やっと口を開くことができた

「歩には、色々辛い思いさせちゃったわね
でも、これからは、大丈夫よ」

歩の母は、幸せそうに笑みを浮かべた

お母さんの事ちゃんと祝福しなきゃ

歩は、このとき母の笑顔を前にしてこう決意した

桜が咲き乱れ何もかもがぴんく色の春

「歩高校合格おめでとう！！！」

歩は、無事志望していた高校に合格した

「ありがとうお母さん」

「もう、高校生なんだから、しっかりしなさいよ！」

「はいはい」

歩は苦笑いで答えた

「もう、歩も高校生か・・・そろそろね」

歩は、息を呑んだ

【受験に集中してもらおう為にあなたたちが高校生になったら逢わせようと思うの・・・】

中学3年の冬に言われた言葉が蘇ってきた

「歩、入学式が終わったなら、すぐ家に帰ってくるのよ??時田サン達とお食事に行くんだから!」

「はい!じゃあー行って来まーす」

歩は、笑顔で玄関を出て行った

「うわー桜綺麗ー!!」

駅に向かう途中満開の桜を見て歩は、目をキラキラさせた

「綺麗・・・」

後ろから男の声が聞こえた

歩がふり向くと

「あ」

あの時と同じ光景

中3の冬あの隣の中学校の制服を着た眼鏡男子……

「あの時の……」

歩は、実はあの時からこの男子生徒の事が忘れられないでいた

「え……とアタシの事覚えてる??」

「は？」

目の前の男子生徒は、不審者を見るような目で歩をじっと見てくる

うつそーアタシ今めっちゃかつこ悪い!!!

顔が真っ赤になるのが自分でも分かった

「ぷッ」

え……今笑われた?!!

「お前の顔桜と同じ色してる」

太い黒縁眼鏡の下の澄んだ瞳、色のついていない自然な髪

あ・・・やっぱりかつこいい、歩は見とれてしまっていた

「あ、やっべもう始業式始まる・・・」

そついい残して目の前の男子生徒は、走り去ってしまった

あ・・・行っちゃった

て!!!!!!!!!!

アタシも遅刻じゃん!!!!!!!!!!

「あーやばい電車に乗り遅れる!!!!」

歩は、必死に走った、普段運動なんてしないから本当死ぬかと思うぐらいに

そして見事に電車のドアが閉まる瞬間滑り込みに成功

やべ、アタシやればできんじゃない!

「ぷッ」

また、あの時と同じ笑い声が聞こえた

え．．．．？？

「今の滑り込みは、凄かったな」

さっきの男子生徒！！

「同じ電車．．．？？」

「そうみたいだな、それが、お前は俺のストーカーか？」

彼がニツと笑う

「／／／」

アタシは、彼の笑顔に弱い

「また、お前の顔桜色してる」

「！？」

「本当步って面白い奴だな」

え．．．．？？

「なんでアタシの名前．．．」

「あッやべ．．．今俺．．．」

「あなた何でアタシの名前知ってるの！？」

「なッ．．．．」

「なんとなく？？」

彼の目が明らか泳いでいる

「本当の事言つて！」

「．．．．さあな」

「はあ？」

何か、隠してるでしょ！もしかして、あんたアタシのストーカー？
「！」

「んな訳ねーだろ！！」

何でお前みたいな奴をストーカーしなきゃいけないんだよ勘違いも
いーかげんにしろや!!」

「……何なのこの男?!めっちゃ腹立つー!!!」

「このストーカー男!」

「この勘違い女!」

「あーッあの時もアンタいたわよね!!!中3の冬から、アンタア
タシの事ストーカーしてるでしょ!」

「はあ?何の話してんの?!!」

「中3の冬アンタ雪道でコケてたじゃない!!!」

「あ　　ッ!!!」

思いだしたぞ!あの時俺の事じーっと見てきた奴だろ!!」

「いーやーッストーカー!!!」

「っせーな！ストーカーじゃねーっつの・・・
て、あっ着いた！

俺ここでおるけどくれぐれもついてくんなよ！！！！」

「誰が、ついてくもんですか！」

ん・・・この駅

アタシが降りる駅じゃん！！！！

「ッ！？

おまえなんでついてくるんだよ！！！！」

「しょうがないじゃない！！アタシもここで降りるんだから！」

「この勘違いストーカー女っ！」

「うるっさいわね！」

「お前どこまでついてくんだよ!!」

「それは、こっちのセリフよ!!」

「俺この高校だから高校までは、まじついてくんなよストーカー女!!」

・・・そこには、アタシが今日から通う塔ヶ丘高校の文字

「あ・・・アンタまさか、塔ヶ丘高校・・・??」

「え・・・まさかお前も!？」

「アンタ筋金入りのストーカーね!!」

「ばッそれは、こっちのセリフだ!!」

「アンタのせいで入学式から遅刻したじゃない!!」

「その言葉そっくりそのままお前に返すよ!!」

ッ！！

なんなのこの男！！アタシは、こんな男にずっとときめいてたわけ？！

「うわっ！お前のせいで式終わっちゃったじゃねーか！！！」

「アタシのせいにしてないでよ！もとわと言えはアンタのせいでしょ！！！」

って、アンタまさか、D組じゃないでしょーね！？」

「は？

D組だけど、お前なんで知ってたんだよ！」

「いや　！！アタシと同じクラスにまでなって何する気よ！！！」

「は　？！お前もまさかD組？！」

歩は、涙目になりながら、コクンとうなずく

「まじかよ・・・」

『こらーそこの1年生自分の教室に早く戻れー！』

「やっべ教室早くいかねーと！」

ガラッ・・・！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まずいこの空気・・・

そりゃそうよね入学式に遅刻＆男と一緒にご登校だもん・・・

「え　と遅刻２人組早く自分の席につけー」

よかった、担任が優しいおっさんで・・・

『えーこれで説明は、終わる１５分間休憩しろー』

ああ・・・

アイツのせいでアタシの薔薇色の高校ライフの第一歩がめちゃくちゃになっちゃったじゃない!!!!

「佐古田サン・・・・・・・・??」

目の前には長い髪が印象の綺麗な女の子がたっていた

「歩ってよんでいい??」

彼女は、笑顔でアタシを見てくる

「全然良いよ」

アタシは、普段人見知りをしないほうなので結構友達は、すぐ出きる方だ

「私の事は、美奈って呼んで??」

「美奈ね!これからよろしくね」

それからアタシは、何人も女友達ができる

「それじゃあ、また明日ねっ!」

「歩ーこれから、みんなで遊び行くんだけど来れるー??」

「あッごめーん!

アタシ今日大事な用あるんだ!」

「そつかあーじゃあまた明日ね」

そういつて、アタシは家へと向かった

「あつ歩お帰りー」

「ただいまー」

あーつかれた・・・」

「今日どうだった？」

「友達は、たーくさんできたよ

あ！でも、今日腹立つ男にも会ったー！！」

アタシは、今日あったストーカー男の事をお母さんに話した

「あらー面白い子じゃないお母さんも会ってみたいわー」

「本当に腹立つんだからッ！！！」

「はいはい、

ほら歩準備しなさい時田さんの約束に送れちゃうじゃない」

「はーい」

「・・・・・・・・時田さんまだ、来てないみたいだね」

高そうな高級レストランお母さんも綺麗に化粧をしている
お母さんもまだ、32歳全然女として劣っていないんだなと歩は、感
心した

「晴子さん!!」

奥の方から、男の人が来た歳は36歳ぐらいの人でとっても優しそ
うな顔をしていた

「正人さん ツ!!」

「ごめんごめん!仕事が長引いちゃって!
あ、始めまして歩ちゃん!」

「始めまして・・・・・・・・」

歩は、できる限りの笑顔であいさつをした

「正人さん、文也君は・・・・・・・・??」

「あー文也なら、もうすぐ来るよ
あ!来た来た文也!」

時田さんの視線を追ってくとそこには

「嘘でしょ……………」
「？」

今朝のアイツ……

誰か嘘って言って……………

「文也あいさつしなさい、春子サンと歩チャンだよ」

「始めまして……………」

アタシは、口をポカンと空けて動く事が出来なくなってしまった・
・
・

「文也君始めまして、こら歩も挨拶しなさいッ!」

「……………こんちわ」

アタシは、ふてくされた子供のような声で挨拶した

なんでコイツは、こんなに冷静でいられるわけ?!

「こら、歩何よその態度わッ!」

「別に良いですよお義母さん」

今朝の時とは、正反対の笑顔で答える

「あら、文也君は優しい人なのね」

この猫かぶり大魔王 ツ!!!!!!!!!!!!!!

「実は、歩チャンと文也は同じ高校なんだよ」

んな事は、よく知ってますよ！

アタシは、そう言いたいのを抑えて必死に作り笑いをした

「そうだったんですか？！歩チャンこれからよろしくね」

は　　ッ！！？！？

今朝会ったばかりじゃない！それなのに何よ初めて会ったみたい
に　　ッ！！

「文也君は、礼儀正しい子なのね」

すっかり、お母さんは騙されてこんな奴を褒めている

それから、アタシは警戒しながら作り笑いをし続けた

「よしッ！そろそろ出ようか」

時田サンのその言葉でアタシ達は外へ出た

お母さんと時田サンは良い感じに寄り添っていた

空気読んで2人にしておいた方が良かな・・・??
そんな事を考えていたとき

「父さんたちは、今日2人で過ごしなよ」

「でも、お前たちを置いてはいけないよ」

「大丈夫ですって、後は2人の時間を大切にして下さいよね？歩チャン」

アイツは、アタシの顔を見ってくる

ここで無理なんて言える訳ないじゃん！！！！！！

「・・・ッそ、そうだよ2人ですごしなよッ！」

お母さんと時田さんは顔を見合わせて照れくさそうに

「・・・そうさせてもらうかな／＼／」

と声を合わせていった・・・

「どうゆうつつもりよッ!」

アタシたちは、お母さんたちと別れて家に帰る事にした

「どうゆうつつもりって???」

アイツの冷たい視線を横から感じる

「アンタ、あたしと兄弟になるって事知ってたんでしょ!
だから、今朝アタシの名前分かったのね!!!」

「そうだとしても、何の問題があるんだよ」

「あー腹立つッ!!アンタいつから知ってたのよッ!!!」

「・・・・っせーな」

「え・・・・??」

視界に急にアイツが入ってきて

え．．．．．？？

唇に生暖かいものが入り込んできて．．．．

「ンツ．．．ハあツ．．．」

力が抜けていく．．．

「やっと黙った」

足に力が・・・

「ちょっとおいッ?！」

アイツの聲がかすれて聞こえてくる・・・

「んッ・・・」

ここは???

なぜか、アタシはベッドの上にいた

「やっと目え覚めたのかよ」

横には、アイツが立っていた・・・

そうだ!!

さっきアタシ、コイツに・・・

犯されるッ・・・!!

「ちょっとお前何処行くだよッ?!」

「嫌ッ! 離してやめてッ!!!」

「待てよッ! まだ足、ろくに力も入んねえだろ?!」

アタシは、今にも倒れそうなくらいふらふらになっていた

「あッ・・・」

危ない転ぶッ!!!

・
・
・
・
・

・
・
・
あれ??

目をゆっくり開けてみると

アイツにお姫様だっこ状態

「だから、言ったる」

「嫌ッ離して痴漢！変態犯される　ッ！！！！」

「あ　ッ　つつせーな！！誰がお前なんか犯すかよ」

「さっき、アタシの口に下入れてきたくせに……………」

「それは、お前がギャーギャー騒ぐからだろ?!」

「だったのに……」

「え……?」

「初めてのキスだったのに……」

「は?!」

「なによ!笑いたかったら笑えばいいじゃない!!」

大きな目にたくさん涙を浮かべて真っ赤になる歩

「悪かったよ……」

え．．．．今コイツ

呆然としている歩に文也は言った

「初めてだったとは
知らなくて．．．．本当悪かったな！」

コイツの口から、こんな言葉が聞けるとは思わなくて
歩は、つい笑ってしまった

「おいッ！何で笑ってんだよ！俺真剣に謝ってるんだぞっ！！」

必死になっている文也が可笑しくて可笑しくて歩は声を上げて笑っ
てしまった

「おいッ笑うなって！」

文也は歩のほっぺをつねりながら怒ったフリをする

「ごめんごめんー
いたいー離してーッ」

歩がもがくが文也はつねるのをやめない

「痛いー」

てか、おろしてよーッ／＼」

「んあ？俺を笑った仕返しだ」

文也は歩をおろすところかお姫様だっこをしたままぐるぐると回りはじめた

「目回ってきたーおろしてよーッ！ー」

歩は半べになりながら、文也に頼む

「良いけど、お前俺がおろしても歩けねえじゃん」

そう言っつて文也は、歩をベッドの上においた

「・・・っ」

歩は、また泣きそうな顔をする

「あゝ俺が悪かった！！」

今日は、ここに泊まっていけ」

歩は、それを聞いて怯えた

「大丈夫なんもしねえよ!!」

文也が必死にフォローする

「うん……」

歩は泣きそうになるのを抑えてコクンと頷いた

「俺シャワーはいるけど、一緒に入るか？」

文也は、ニヤツとしながら歩に向かっておどけてみせる

「ばかッ／＼／＼」

そんな冗談にも歩はドキドキしてしまっていた

「アタシおかしくなっちゃったのかな？／＼」

歩は、このとき自分の気持ちには、まったく気づいては、いなかった……

「おい！上がったぞー」

文也が歩がいる寢室へ行くと

「寝てるし……」

気持ちよさそうに寝ている歩の姿

「俺がいるのに無防備な奴だな……」

文也は、ため息をもらし歩に布団をかけてやった

「そんなに可愛かったら襲っちゃうよ？」

歩は静かに寢息をたてている

「……ッて、俺は兄弟に何言ってるんだよ／＼／」

文也は歩の髪をなでていくうちに睡魔に襲われた……

「んっ・・・ふわっ

て・・・

キヤアアああ！！！」

「んっ・・・朝っぱらから、大声だすなよ」

「なっ・・・なんでアンタがアタシの隣で寝てるのよっ！／／／」

「あー俺昨日そのまま寝ちゃったのか・・・」

「アタシが寝ている間変な事してないでしょうね！？？」

「まっさか、お前みたいなガキに何かしようって気も起こらねえよ・・・」

「・・・ッ！」

「てかー先シャワー入ってこいよ・・・」

タオルと俺が中学ん時着てたジャージ置いておくから」

「ありがと・・・」

そう言って歩はバスルームへと向かっていった

アタシおかしくなっちゃったのかな？！

アイツを見ていると凄く苦しくなる・・・

何よこの変な気持ちはっ／＼／

歩は、シャワーを浴びながら必死に自分の頭からアイツの顔を消し
さった

「シャワーありがと・・・／＼／」

「あ、うんてか朝飯できたから一緒に食おう？」

「朝ご飯ぐらいアタシが作るのにつ／＼」

「お前作れんのー？」

「なっ／＼失礼ね！家事は得意なんだから」

「じゃー今度俺の好きなハンバーグづくりやがれ」

何だコイツ何様のつもりだと腹を立てたものの……

「プッ

ハンバーグとか子供」

なんて、可愛く思えちゃうアタシで病気なの?!

「ハンバーグ馬鹿にすんなよー!」

とムキになる彼

「はいはい、今度作ってあげるから」

「約束な」

つか、そのうち俺とお前一緒に暮らすんだよな……」

「来月には引越し手続きするって」

何か変な感じだった……昨日まで赤の他人だった人がいきなり兄弟になってしまっただもん

「俺12月21生まれなんだけどお前いつ?」

「アタシ12月16日生まれ……」

「うっそ! まじかよ俺お前の弟って事になんじゃん!」

「ははは

てか……」

今日学校じゃん！！！！」

「まだ、時間あつから、お前ん家行つて準備してこいよ」

「うんわかった！

じゃあご馳走様でした！！」

歩は、そう言つて文也の家をでていった

「よし！準備OKっ

今日こそは、遅刻しないぞ！！」

歩は、そう言つて玄関をでた

「お前おっせーよ！」

門を出たとき後ろから声がした

「え？待っててくれたの？！」

そこには、文也の姿があつた

「ちげーよ勘違いすんな／＼ただ、暇だったからいたただけだよ！」

眼鏡をかけている文也は、さっきまでの文也と別人かと思うぐらい
ガラッと変わる

「昨日ずっと眼鏡かけてなかったよね・・・？」

あれっと思ひ歩はッ文也に問いかける

「別にどーでも良いだろ・・・」

「あれ、その眼鏡・・・」

歩は文也の眼鏡を取った

「ばっ返せ！！！！！！」

「やっぱり伊達じゃん目悪くないのになんで眼鏡かけてんの？」

「お前には、関係ない」

文也は怒った表情で歩から眼鏡を取り返した

歩はずっと疑問だった着ている服や物はお洒落なのに

学校に行くときは、前髪を垂らしぶつとい黒縁眼鏡をかけ

歩には、わざと自分をキモく見せようとしているようにしか、見えなかったのだ

「普通にしたら、絶対モテるのに・・・」

第2話

「っせーんだよ!!」

歩は、びっくりして鞆を落してしまった

「ごっごめんなさい・・・アタシそんなつもりじゃ・・・」

「・・・ごめん大きな声出して・・・
俺先に学校行ってるわ・・・」

そういつて文也は歩を置いて行ってしまった

「あたしの馬鹿・・・」

誰にだって、触れられたくない事の1つや2つあるにきまつてるじゃない
それなのにアタシ・・・

「あー歩じゃん」

後ろから、聞き覚えのある声がした
歩が振り返ると

「美奈っ!!」

「歩も1人??なら、一緒に行こ」

相変わらずテンションが高い美奈

「ウン、いーよ!」

「歩っておしゃれだよー!!」

「そんな事ないよ」

「私服OKの学校ってその人のセンスがすぐ分かるじゃない?」

「あーまあ、そーだよーね」

「おしゃれといえばー時田だよーね」

「・・・・・・・・。」

歩は、何も言う事ができなかった

「そういえば、昨日歩時田と一緒に来てたよね
もしかして、付き合ってるのか?!」

「そんな訳ないじゃない!!!
昨日は、たまたま会っただけよ」

歩は、必死で弁解した

「そーだよーね」

あの女嫌いの時田が彼女作るわけないよねー!」

「美奈もしかして、時田と同じ中学校だったりする?」

「あーうん、同じ中学校だったよ？
あいつ昔は、明るくておしゃれでかつこいって超モテてたんだよ
！以外でしょー」

「うつ、うん・・・」

歩は、思うように口が開けなくなっていた

「だけどね、時田を狙った女の子達の間で喧嘩が起こっちゃったの
さあ

それで、何人も怪我人が出て先生や校長先生にまで時田は責められ
たばいよー？」

「何ソレ時田なんも悪く無いじゃん！！！」

「そうなんだけどさ・・・あいつ責任感じてあんなだったさい伊達
眼鏡までしちゃって

モテすぎるってゆーのも大変なんだよね」

歩はもう出てくる言葉が無かった
アタシアイツの事傷つけた・・・

「ちよつ歩？！」

何で泣いてるの？？大丈夫？！！」

「うん・・・ごめん美奈・・・」

「気にすんなってうち等トモダチじゃん！！！」

美奈のその一言が余計歩の目に涙をためさす事になった

「うわぁ〜ん美奈ああ」

「歩、落ち着いた??」

「うんありがと美奈!」

「いえいえ、」

「てか、あたしのせいで美奈まで遅れちゃうよ〜!!!!」

「大丈夫だつて!

ほら、急ごッ!!!!」

歩と美奈は、急いで教室へと向かった

ガラッ！！！！

「歩セーフだよー！！」

美奈は、ニコツと歩に向かってピースした

「よかった」

「ありがと美奈！」

「あー歩と美奈やつと来たー！！」

クラスの女子たちが次々と歩たちへの元へと向かって来た

「へへへごめん」

「・・・・・・・・・・」

そんな歩の姿を見ている男子生徒が一人・・・・・・・・

「文也ー」

「何見てんの？？」

そう言って文也の前に現れたのは、幼馴染の信吾だった

「ベッベつに・・・／＼／」

文也は、慌てて歩から視線を外した

「はっはっん

俺分かつちやった！

文也あの女子の中に気になる子いるんだ〜！！」

信吾はニヤニヤとしながら、文也を見た

「ばッ／＼／

そんなんじゃないよ！！！！！！」

「お？ムキになるところがますます怪しい〜どの子？？」

信吾は、女子生徒一人一人を見ていく

「美奈は、文也のタイプでは無いしよ〜

あ！もしかして、

昨日一緒に登校してきた・・・なんだっけ・・・」

信吾は、腕を組んで考えてるポーズをする

「あ！佐古田歩だっけ？？」

その子でしょ！！！！」

信吾は昔から変わらないあの笑顔を俺に向けた

「んな訳ねーだろ」

文也は、そんな信吾の頭をくしゃくしゃと撫でた

「うわあっ！

よめるよお文也あ

あーあ違うのか・・・でも、あの程度の可愛さで1番男子にウケるんだよねー」

「え・・・??」

「可愛すぎでもなく普通すぎでもなくて、結構先輩方狙われてるばいよー」

「・・・・・・・・・・」

文也は、声もでなかった

なぜかは、自分自身よくわからなかったけどとにかく胸が苦しくなっていた

「文也つてば!」

「え・・・どうした?」

「どうしたって文也ばーっとしてるんだもん!」

「あ、悪い悪い、」

「歩て好きな人いるー??」

「え・・・?!」

「いるんだー」

「だれだれー?!」

夏帆は目をキラキラさせながらアタシに近づいてくる

「いないよー夏帆は、いるの??」

「んゝあたしも、いないだってこのクラスあんまかつこいい人いなくない??」

「そつそうだね・・・」

アタシは、このときなぜかアイツの顔を思い出してしまった

「このクラスのイケメンといえば・・・
あそこにいる２人じゃない??」

【イケメン】とゆう言葉に反応して次々と女子が集まってくる

「時田 文也と山崎 信吾よねえ」

「えー時田って人服はおしゃれだけど
髪長くて怖いし、眼鏡ダサくない??」

女子が集まってきてあーだこーだいつてる中アタシは
また、あの時と同じ胸の痛みに気づいた・・・

「えーアンタしらないの??」

時田文也て本当は、めっちゃめっちゃかっこいいのよー!!」

「えー嘘信じらんない!!」

「あれは、わざとモテない為のカモフラージュなんだって!!
結構時田の事狙ってる女子多いんだから!」

やめて・・・

苦しいよ

アイツの名前他の女子に言われただけでなんでこんな苦しいの??

「うひょー」

文也の近くにいた男子が歩たちの方を見て鼻を伸ばしている

「おい、見てみるよ！

佐古田のパンツ見えんぞ！！」

「うわーモテない男子はこれだから嫌だよー」

信吾が苦笑いで文也の方を見てくる

「
．．．．．」

「おい？文也どこ行くんだよ？！」

文也は、歩たちの方に近づいていく

「きゃーッ！！」

夏帆の叫び声が聞こえてくる

「時田文也がこっち来る／＼／＼！！」

歩が顔を上げると

え．．．．？？

アイツと目が合う

「歩．．．．」

名前を呼ばただけで顔が赤くなるのが分かる．．．

「女子のみなさん

ちよつとコイツ借りるね？？」

呆然としているアタシの腕を掴みアタシが連れてこられたのは
人気の無い教材室

「なツなによ．．．／／」

「お前無防備すぎ」

「は？

なんでアンタにそんな事言われなくちゃならないの??」

歩は、素直な気持ちと言えなかった
ごめんなさいって

謝ろうと決めていたのにも関わらず
文也の顔を見ると反対の事ばかりが口に出てしまう

第3話

「ッ嫌なんだよ……………」

「へッ??」

「お前が他の男に下心のある目で見られんのが嫌なんだよ!!!!!!」

それって…………

「アンタあたしの事嫌いなんじゃ…………」

「嫌いだったら、こんな事言つかよ!!!!!!」

文也は、人生で始めて告白した…………

つもりだったが…………

「兄弟愛ってやっぱりいいね!!」

歩が文也をキラキラした目で見る

「はッ?!」

「いやーアタシ兄弟いなかったから、
こうゆう兄弟愛羨ましかったんだよね!!!
これからよろしくね

弟として!」

「はははは・・・」

文也は、人生で始めて失恋をした
この天然な姉に・・・

「あ!

アタシ美奈と約束あるから、またね」

そう言って歩は、教材室に文也一人を置いて行ってしまった

「なんでこーなるんだよ

気づけよなあ馬鹿・・・・・・・・」

文也は、この先の事を考えると愕然となるしかなかった

その頃歩はとゆうと・・・・・・・・

「・・・・・・・・ツ／／／／／
なんなのよアイツ／／」

さっきのってどうゆう意味なの?!／／／
アタシの考えすぎなだけ?!
つい、さっきは茶化しちゃったけど・・・・・・・・

「もー意味分かんない　ッ!!!!!!!!!!!!!!」

「どーしたの??」

歩がびつくりして、後ろを振り向くと
そこには、信吾の姿が

「あ……えと……／＼／＼」

今の独り言を聞かれたと分かって歩は、顔を赤らめた

「可愛いー」

顔真っ赤だよお?

大丈夫??歩ちゃん」

「え……なんでアタシの名前……」

「あーやっぱ僕の事覚えててもらえなかったか……
僕は、歩ちゃんと同じクラスの山崎信吾だよ
これから、よろしくね　」

山崎信吾……

どこかで聞いた事ある名前だなとふと考えこむ歩

【このクラスのイケメンといえば・・・
時田文也と山崎信吾よね！！】

あの時夏帆が言っていた言葉を思い出す

確かに、綺麗な顔立ちをしていた、どちらかというと
てゆか、めっちゃ女の子みたいな顔立ちだった・・・

「僕、歩チャンと1回お話してみたかったんだあ」

「え・・・アタシなんかと??」

「初めて見たときから、この子可愛い子なあって思ってたんだよ」

「またまた」

そおやって女の子達何人も口説いてきたんでしょー」

そう言つて歩は、信吾のおでこに軽くでこピンをした

「違うのに・・・」

僕本当に歩チャン可愛いなて思つて

お友達になりたくてっ・・・」

信吾の大きく澄んだ瞳に大量の涙が浮かんだ

「えっ信吾君?!

ちよつごめんアタシが悪かったから!!信吾君の事信じるから
ねっ?泣きやんで??」

歩は、必死に信吾を泣き止ませようとした

「本当に??」

僕の事信じてくれるの……??」

信吾は、歩の顔を覗き込むように見る

「うっうん!!」

「やったー」

じゃあ、歩って呼んでもイイ??」

信吾の豹変ぶりに驚かされながらも歩は、信吾に笑顔を向ける

「あッ！」

僕の事は、信吾でよんでね?」

信吾は、相変わらずの上目遣い

歩は、身長が高いほうではないが信也と並ぶと、すごい差があった。
・・・

「信吾って

もの凄く可愛いね……」

つい口から、こんな言葉が出てしまうほど信吾は 美少女 だった

その時

ぎゅっ・・・

「え・・・・・・・・??」

信吾の顔が歩の胸元に蹲った

「歩ひどいよ・・・」

僕この顔のせいで散々馬鹿にされて、いじめられてきたのに・・・
「」

「そうだったの?!」

ごめんね信吾・・・

アタシ気づかなくて

本当ごめん・・・」

歩は、信吾の体をきつく抱きしめた

その時歩には、男を抱いているとゆう感覚がなかった、男とゆうより綺麗なお人形を抱っこしているとゆう感覚の方が遥かに上回っていた

その頃文也とゆうと・・・

「本当覚えてるよあの天然馬鹿女

俺がいないと生きていけないようにさせてやる！！！！」

文也が、そんな事を呟きながら歩いていると・・・

「・・・」

何やってんだよ奴彼等」

文也の数メートル先には、抱き合っている歩と信吾の姿・・・

文也の存在に先に気づいたのは、歩だった

「あつ・・・」

これは、そうゆう訳じゃなくてっ!」

必死に弁解しようとする歩に対して
怒りを抑えきれない様子の文也

「あつ!

文也じゃ〜ん」

やっと文也に気づいた信吾は、空気も読まないで文也に近づく

「こんの馬鹿っ!!!」

文也はついに大声をあげた

「どーせ、お前信吾に可愛いとかなんとか言われて
その気になったんだろこの勘違い馬鹿女!!!!!!!」

「なによ!

信吾は、アタシの友達なんだから!!!」

「はッ

てか、お前男の信吾よりも女の子らしくねえんじゃねえの?!」

歩と文也の凄まじい喧嘩に信吾は、ポカンと口をあけることしかできなかった

「そんな事言ったら、信吾可愛そうじゃない!!」

この顔立ちのせいで信吾は虐められてたんだからっ!!!!」

「はア?!

何言ってるの?!!」

信吾は、俺とずっと同じクラスだけど虐められた事なんて1度もねえよ!!!!」

「え…….?だつてさつき信吾……」

歩と文也は、信吾の方を見る

「え…….と

アハハハハ

ばれちゃったてへ」

「しーんーじー!!!!!!!!」

この後文也と歩からきついお仕置きがあつたのは、言うまでもない…….

第4話

あれから、2週間学校にもなれて友達もいっぱい増えた

「歩ー自分の荷物ちゃんとまとめたのー??」

「うん、もー少し!」

アタシたちは、お母さんの再婚相手時田サンのお家に引っ越す事になった

「もう引越しセンターの人が来ちゃうんだから早くしなさい!!!」

「はいはい」

歩は、低血圧のせいで朝が弱く朝早く起こされて機嫌が悪かった

ピンポーン

インターホンが鳴る

「あら、引越しセンターの人かしら!!
歩お母さん忙しいからでてちょうだい!」

「はい・・・」

歩は、だるそうにドアを開く

そこには、

引越しセンターの人なんかではなく
ダルそうに歩を見下ろす文也の姿

「なッ！！！」

なんでアンタがいるのよっ！！！！！」

「しゃーねーだろ！！」

俺だって来なくなかったけど父さんに頼まれたんだよ！！！！」

相変わらずアタシたちは、顔を合わせれば喧嘩ばかり
本当にこの先やっていけるのかと歩はいつも不安だった

「あら、文也君！！
手伝いに来てくれたの？？偉いわねえ」

お母さんは、まだコイツの本性を知らない

「いえいえ、父に頼まれたものですから……
何かお手伝いする事はありませんか?」

「そうねえ……お手伝いといっても全部終わっちゃったし……
あ! そうだ! 歩の荷物まとめるの手伝ってあげてくれないかな?」

「え?! ちよっお母さん何言って……」

「いいですよ」

にこやかにアイツが微笑む

なにOKしちゃってんのよ!!!
と内心むっとしながらも歩は、自分の部屋へ向かった

「早くまとめねえと引越しセンターの人来るぞ……」

「分かってるわよ!!」

アンタこそアタシの部屋になにしに来たのよ!!!」

「文也……」

「え・・・??」

「だから、俺の名前はアンタじゃなくて文也！！！！
これから、文也って呼べ・・・」

何よその命令形わッ！！！！！！

「分かったわよ！

歩は、少しためらいながら、アイツの名前をよんでみる

文也・・・

その荷物取って」

「ん・・・ 何か??」

その時一枚の写真がひらひらと落ちてきた

「なんか、落ちてきたぞ・・・

「……!？」

その写真を見て文也は驚いた

写真の中には、なんと幼い頃の自分がいた隣には、昔仲の良かった文也の初恋の相手がピースをしていた

その子の名前は、確か……………

あゆむ

文也は、まさかと思い写真の少女と目の前にいる義理の姉を見比べた
髪型は変わっていたが昔と変わらないあの大きな瞳と微笑むことに
うつすらと浮かぶえくぼ……………

「あー懐かしいそれ、あたしが幼稚園の時の写真!!」

「……………て、何固まってるのよ……………??」

「……………この隣にいる男の子、俺……………」

「ええええええええええ?!?!?!
ふっちゃんて……………」

文也の事だったの?!?!」

懐かしいそのあだ名俺は、昔からコイツにふっちゃんとうゆつ変なあだ名をつけられていた

「こんなおつきくなっちゃって・・・」

「おばさんみてえな事ゆうなよ・・・」

文也は、そんな歩の頭をくしゃつと撫でた

「ふっちゃんあんな弱虫だったのに・・・」

歩は、文也に向かって思いっきり下を出した

「過去は、ふりかえらねえのが男だ!!!
そんな事いいから早く荷物まとめろよ」

そんなかつこつけた事言っても

文也の顔が真っ赤だったのは、歩は言わないであげた

「歩、文也君準備はできた?」

下からお母さんの声が聞こえてきた

「あ!まだ途中だった!!!」

「しゃーねなー歩ガムテープよこせ！」

そついつて部屋の荷物をまとめだす文也

歩・・・

自分の名前を文也に呼ばれて、歩はなんだか恥ずかしい気持ちになつていた・・・

「ふうやつと終わったあ・・・..
ありがとね文也／＼」

やっぱりまだ、名前を呼ぶのは恥ずかしくて歩の声は震えていた

「はは、何声震えちゃってんの
まさか、俺の事意識しちやってる系?？」

文也は奇妙な笑顔を歩に向ける

「え・・・..
」

歩の顔は、真っ赤で今にも泣きそうな顔をしていた

「・・・・・・・・」

沈黙が続く・・・

ヤバイ・・・

アタシの気持ち文也に気づかれた・・・？

歩の中には、凄い焦ってる自分と、

もういつその事バレてるんなら告白しちゃおうか
なんて思っている自分がいた

「歩・・・・・・・・」

歩は、文也に急に名前を呼ばれてビクッとする

「歩は、

俺の事どう思ってるの・・・・・・・・？？」

文也が覗き込むように歩の顔を見る

「どっ・・・

どうって別にッ／＼／／」

歩は、無理やり文也を突き放し目を逸らした

その時・・・

ぎゅっ・・・

文也は、壊れ物でも扱うように歩を優しく抱きしめた

「だッ

駄目よッ／／／

あッあたし達は、兄弟なんだからッ・・・／／」

「良いよそんなイイ子ぶんなくて
本当は、嫌じゃないんだろ・・・?？」

文也は、歩の全てを見透かしたとでもゆつように
もっともつと歩をきつく抱きしめた

「俺が欲しいって顔してる……」

「していないッ／／」

文也は、何かを企む子供のような目で歩を見つめた

「んッ／／

ふみやッ……／／」

文也はあの時と正反対の優しいキス歩にプレゼントした

本当に触れているのかすら疑うような柔らかい唇

あまり、男慣れしていない歩のカラダは
異常なほど文也に対して敏感になっていた

「ッ／／／／」

「歩……

めっちゃ可愛い／／」

「やつ……

そろそろ、お母さんきちゃうつよ……／／／」

「心配性すぎ、

じゃあ、もうやめてあげる？

歩からキスしてくれたら・・・」

「え！？」

アッアタシから、キス??!!

歩は、パニック状態になっていた

「嘘だつて」

文也が歩に向かってニコリと微笑む

「俺達これから、一緒に住む訳だし

俺が居ないと生きていけないようにしてやるよ」

「ゝ?!!／／／」

歩は忘れていたが、これから、文也とずっと一緒に暮らすのだ

それだけでもう歩は、何かなんだか分からなくなっていた

第5話

ピピピピピッ …

「んッ ……」

カーテンから、春の日差しが差し込んでいる

普段低血圧のせいで遅起きの歩だったが

この日は、なぜか目覚めが良かった

「んッ？」

やけに、布団が生暖かいことに歩は気づいた布団をめくると

そこには

義理の弟文也の姿 ……

歩は、パニックになりながらも昨日あった事を振り返ってみる

昨日は、時田家に引越してきて・・・

引越しの荷物を自分の部屋に置いて

もう12時をまわっていたので歩はベッドに入ろうとした瞬間
文也が部屋に入ってきて・・・

そこからの記憶が無い・・・

アタシは、焦って文也を叩き起こす

「ん・・・

なんだよ・・・」

「なんだよじゃないでしょー?!」

何でアタシのベッドに文也が居るのよ?!」

「そりゃあ・・・

まあ世間一般にゆう夜這いってやつ?」

アタシが一番弱い彼のあの笑顔がアタシに向けられる

「よっ夜這いつて！」

お母さんたちに見つかったらどおすんのよっ！！！！」

「あー父さんたちならとづくに仕事行っただし・・・

今日は、学校休みだし、俺と歩の2人つきりって事だね」

「ふっ二人つきり！！??？」

「そーんなに俺と2人きり嫌かよ」

文也は、子供のようにほっぺを膨らます

可愛い・・・

それは、もう抱きしめてあげたくなる程だった

「文也ーごめーん
機嫌直してー??」

「じゃあ、俺の言うこと聞いてくる??」

また、この子は可愛らしい事を・・・
なんて思いながらも歩は頷く

「じゃあ、これから歩は俺の彼女ね」

「え．．．??」

それは、思ってもみない言葉だった

「表上は、兄弟って事にしてあげるけど
裏では、歩は俺のモノだからな」

真剣な文也の表情に不覚にも歩は、凄いきめいていた

顔を赤らめながらも縦に2回コクンと頷く歩

「やった！」

急に文也に抱きつかれた歩は、驚いてベッドに倒れこんだ

え．．．

今のこの状況かなりヤバイよね．．．

文也が歩を押し倒している光景

その恥ずかしさに歩は、耐え切れず思わず目を瞑る

「すごい、警戒してるね・・・」

俺たち恋人同士なんだよ?? そんな警戒しちゃ駄目でしょ」

文也は、ぷツと笑いながら歩の上から降りた

「ッ／＼」

歩は、何も言えずに顔を真っ赤にしている

「そうだ！

歩が、今日出かけない??」

思いもよらないお誘い

いわゆる世間一般でゆう【デート】てやつですか？

「勿論、ひ・・・」

そこまで言いかけたとき

）
）

アタシの携帯になる・・・
この着信音は

「美奈だ・・・」

画面を開いて通話ボタンを押すと

『おは～！！』

歩起きてた？？！！』

朝だとゆうのにも関わらず美奈は、凄いテンションが高い

「ん・・・

起きてたよ・・・」

歩は、チラッと文也の方を見ると口パクで

だれ？

と聞いているのが分かる

みな

アタシは口ばくで文也にそう答える

『歩く』

今日暇??』

歩は、困った友人を取るべきか恋人兼弟を取るべきか・・・

「美奈え・・・とねん」と

『まじで?!!!』

やった歩ありがと超大好き!じゃあ、10時に駅ね!!
んじゃばーい』

まだ、何も言っていないのに・・・
恐るべき美奈のポジティブさ

「文也ごめん・・・。」

歩は、申し訳なさそうに文也を覗き見る

「だいたい分かるよ・・・
美奈のヤロ〜!!」

せっかくの初デートを!!!!」

「ごめんなさい・・・」

「別に良いよ

朝は、美奈に歩を貸してやる！！！！

でも夜は、歩は俺だけのモノだからな？」

また、あの奇妙な微笑みを浮かべる文也

「っ／＼うん」

「じゃ、俺も信吾と遊び行こー！
じゃあまた夜な、歩・・・」

そう言つて文也は、
歩の部屋をあとにした

「よし！
支度するかっ！！！！」

歩は、大急ぎでメイク道具を引っ張ってきた

「美奈」

「ごめん待った?！」

歩は、息をきらして美奈のもとへと向かう

「大丈夫」

「じゃあ行こっか」

「で、美奈今日はどうしたの?」

「え」と・・・

「歩彼氏いる?」

え．．．．？

まさか、文也と付き合ってる事バレた．．．．？

「いないけど．．．．」
とっさに歩は、嘘をついた

「なら良かった〜！！
今日うち等、女2人てのも寂しいでしょ？
隣の男子校の生徒も呼んでおいたの」

え．．．．．

歩の額から冷汗が滲みでていた．．

「アッアタシ！」

美奈に帰ると告げようとした時．．．

「うわ〜
美奈のトモダチめっちゃ可愛いじゃん！……！」

歩の目の前に2人の男が現れた

1人は、茶髪で長身の世間一般でゆう

【イケメン】とゆう言葉がピッタリの男

2人目が・・・

今時風は無造作に立てられた

赤茶色い髪が印象の眼鏡の男

2人の、モテそうだなとは、思うが歩のタイプではなかった

やっぱ、文也が一番かつこいい・・・

歩は、心の中一人で惚気を言っていた

「ほら、一人ずつ歩に自己紹介してっ!!」

美奈が取り仕切る中1人目のイケメン君が挨拶を始めた

「タクヤです」

よろしく歩ちゃん」

「はぁ・・・」

歩は一つ発見した事があった、こつゆうチャラい人って、

【タクヤ】だとか

【タクミ】だとかって言う名前が多いんだよね・・・

一人で笑いそうになるのを必死で堪えた

「俺は、渉！」

歩つてよんでいい？？」

「はあ……」

歩は、相変わらずの適当な返事をしておいた

「ずるいぞ渉!!」

なんて、タクヤとゆう男の批判を浴びながら
渉とゆう男はニツと笑った

2人目の眼鏡男子君は文也とは、違つて
いわゆる伊達眼鏡

なんで、目悪くねえのに眼鏡掛ける必要があんだよ!!!
とまたもや、歩は心の中で一人つつこんでしまった

「はあ……」

「え……と歩です
よろしく……」

歩は適当に自己紹介をして美奈にテレパシーを送ってみた

美奈もうアタシ帰りたい……

「なに、歩アタシ見てんのよ
この中で気になる男でもいた?？」

小声で美奈は歩にそうゆう

やっぱ駄目か……

歩は、苦笑いしながら美奈の方をみた

「よし！

じゃあ行こっか！」

タクヤが取り仕切る

「美奈ところで今日は何処行くの??」

「んゝ服とか靴とか欲しい物いーぱいあるからー
それ買って帰りご飯たべよ??
やっぱ、荷物運びに男は必需品でしょ!!」

しかも、みんなアタシの元同中で一番モテた3人だから隣にいただけで目立つでしょ？」

「はぁ・・・」

歩は、もはや疲れきっていた

「歩の、好きなタイプは？？」

隣でさっきからしつこい男タクヤ・・・

「真面目っぽそうで、眼鏡とかかけてる人・・・」

アタシは、タクヤと正反対のタイプを言ってみた

「それ、俺じゃ～ん？」

後ろから、ひょいと渉がでくる

「俺、眼鏡男子だし～!!」

「渉お前その眼鏡俺にかせや～!!」

タクヤが渉の眼鏡を取ろうとする

「やめろー！馬鹿っ
アハハハハハ！！」

なんだかこの人たち、悪い人では無いんだなーと歩は思った

「あーこの服可愛い！！！！
歩見てみてー」

美奈のもとへと行くと美奈はレトロな模様の可愛いワンピースを
手にしていた」

「本当だー
美奈きつと似合うよー！！」

「アタシちよつと試着してくるね」

そう言つて美奈は試着室へと走つていった

「文也今日機嫌悪くね?？」

それもある筈今日は歩とデートのはずだったのに
美奈のせいで行けなくなっただのが文也は気に食わなかった

「その表情は女絡みだな?？」

そうだ、今から女の子でも呼ぶ?？」

「今はそーゆー気分じゃねーし・・・

てか、俺の親父再婚したって信吾に言っただよな?？」

「あー中学とき聞いたあ!

もう正式に再婚したんだあ!」

「それだ、再婚相手に俺と同じ年の娘いるってのも言っただよな?？」

「そうそう、

文也その子の事

わざわざ隣の中学校まで行って
毎週見にいったよな」

「そこまで俺信吾に言ってたっけ・・・」

「忘れちゃったのー??」

それで、その子に雪道で転んだ所見られたって
文也超落ち込んでたじゃん!!」

その時文也は俺って信吾になんでも話してたんだなと実感した

「その子の事文也喜欢なんですよ??」

俺は、飲んでいたコーラを思わず噴出した

「うわぁー

文也汚いー」

「俺そんな事までお前に言ってたのか?!」

「文也みてれば分かるよー

で、その子どんな子なのー??」

信吾は、ニヤニヤと文也の顔を見る

信吾にならもう全部話しても良いか・・・

「俺のクラスにあゆ・・・」

文也は、そう決意して信吾に歩と付き合っていることも言おうとした

「どうしたの文也?」

信吾が文也の視線の先を追っていくと

「あ、アイツ昔同じクラスだった渉とタクヤじゃん！！
隣にるのが、

え・・・歩じゃん・・・
なんであいつ等・・・」

「・・・・・・・・」

文也が無言で立ち上がり歩たちのもとへと向かう

「それで、コイツ馬鹿なんだって
アハハハハハ！」

歩は、すっかり渉とタクヤにも慣れて渉の昔話なんかをしていた

「あ！

タクヤあれ、文也じゃね？？」

「本当だ！！」

「おい文也ー!!」

え・・・・・・・・？

歩はタクヤたちが手を振っているほうを見る

「嘘でしょ・・・・・・・・??」

30メートル程先には、凄い怒った顔の文也

「文也久しぶりー
元気してたー??」

渉が文也の肩に手を回す

「歩

「お前こんな所で何してんの？」

歩は、下を俯く文也の痛い視線だけを上から感じる

「え・・・？」

歩と文也知り合い？」

全く場の空気をよめないタクヤと渉は
ポカンと口を空けるしかできなかった

「文也ー！！！」

後ろから、信吾の音がする

歩は、もうどうしていいか分からずに
ただただ、ずっと下を向いていた

「もういい

お前の気持ちちは、分かった・・・

もうお前と俺は、何の関係もねえから安心して
こいつ等と遊べよ」

文也の冷たい目

「やあ・・・ふみやっ・・・やだよっ・・・」

歩は、子供のように泣き出す

「もう俺の名前呼ぶな」

文也は、そう言い残すと歩の前から、消え去った

「っ・・・やあ・・・ふみやあ・・・」

「歩大丈夫か??」

歩が優しく歩の涙を拭ってあげる

「ありがとう、歩・・・」

「歩ー!」

少し先には、さっきの店の紙袋を持った美奈が手を振っていた

「なんで歩泣いてる?!?!
ちよつと!タクヤあんたでしょ!?!」

「ちつ違うの美奈ッ!

あ・・・アタシ気分悪いからもう帰るね?」

「え・・・?」

「俺歩送っていくからタクヤと美奈は、2人でまだ買い物してなよ」

「・・・・・・・・歩大丈夫?」

心配そうに美奈は歩を覗き込む

「うん大丈夫!

ごめんね心配かけて」

「よし!

じゃあ美奈俺と買い物しよーぜ!」

「ちよつ!

タクヤ?!?!」

そういつてタクヤは、美奈も手を引き
歩たちから、離れていった

「ごめん渉・・・

渉も美奈たちと買い物してたほうが・・・」

結局歩は、渉に家まで送ってもらった事になった

「いや、俺も丁度帰りたいと思ってたし
歩一人で帰らすなんて俺には出来ないよ・・・」

「ありがとう渉・・・」

「・・・歩？」

答えたくなかったら良いんだけど、
文也とは、どーゆう関係なの？？」

「・・・」

歩はまた、涙が出てそうなのを堪えた

「あ．．．ごめん変な事聞いて．．．」

「ううん．．．」

「こっちこそごめん．．．」

「歩の家これから変なの？？」

「あ．．．うん」

この時歩は、ある事に気がついた．．．

今日は、お母さんもお義父さんも仕事だ．．．
もし、帰って文也がいたら凄い気まずい事になる．．．

「渉．．．」

歩は、また涙を流しながら渉の服の端を引っ張る

「まだ、家に帰りたくない．．．」

「え．．．．．？？」

「今、家に帰ったら文也に怒られるっ・・・」

「そっか、

じゃあここの近くに俺がよく行く店あるんだけど行かない?」

「いいの・・・?」

「勿論!

ほら、涙ふいてっ」

渉の微笑みの中には
裏の渉がいること

そんな事歩は分かるはずなかった・・・

最終話

「文也」

そんな怒らないでよあ・・・」

信吾は、呆れ顔で文也の肩を叩く

「っせーな!!!」

俺は、別に怒ってなんかいねーよ!!!」

「もういい加減帰ろう??」

文也はちゃんと歩と話し合った方がいいって・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

しょうがなく、文也は帰ることにした

「もう9時か・・・」

父さんたちは、食事してくるって言っていたから
家には、アイツ一人か・・・

「あれ??」

文也の家電氣ついてないよ??

歩まだ、帰ってきてないんじゃない?」

え……???

「……………」

文也……………ちよつとヤバイかもよ……………」

信吾の真剣そうな顔

文也は、急いでケータイを取り出した

「……………俺、歩のアドレスも番号もしらない……………」

「ええええ?!?!」

どうすんのさあ!

歩あいつ等に襲われてたら……………」

急いで文也は、アドレス帳の中から、タクヤのアドレスを探す

タクヤ…………

タクヤ……

いたっ!!!

急いで文也は発信ボタンを押す

ツーツツ

『もしもし……』

「タクヤ?! お前歩と一緒に帰か?!」

『え……?』

歩なら、とつくに涉と一緒に帰ったよ』

「え……?」

『もしかして、まだ帰って来てない……?』

「ああ……」

『そりゃ、大変だ!!!』

文也早く探さないと……!!!』

「心当たりは、あるか?!」

『それなら、一つ思い当たるところがある!!!』

「渉・・・??」

震えながら歩が尋ねる

「なーに ア ユム？」

「なっなんでここのドアの鍵開かないの・・・??」

数十分前渉につれてこられたオシャレな喫茶店
2人きりではなしたいと渉は、VIP ROOM と書かれた部屋
に歩をつれこんだのだった

「そーれはね

それ、外からしか空かないようになってるんだ」

さすがに鈍感な歩でも、自分の身の危険を感じた

「渉っ！！」

アタシもう帰る！！

ここから、出してッ！！！」

歩がドアをドンドン叩く

「ドア叩いて助け呼んでも無駄だよ……？？
外には、見張りがついているからね」

鳥肌がたつような渉の微笑み
さっきの優しかった渉とは、まったく別人だった

「歩も、ここまでノコノコと付いてくるって事は、こーゆー事期待
してんだろ……？？」

渉の手が歩の首筋に忍び寄る

「やっ……！！！！
文也っ！！助けてッ！！」

「だーから、助け呼んだって無駄だって

もう文也とは、こーゆー事したの??」

一枚一枚ゆっくりと捲っていく渉

「触らないで!!」

初めては、文也とって決めてるんだから!!!!!!」

「え・・・何歩処女なの???以外」

歩は、顔を真っ赤にした、
目には、大粒の涙が溜まっている・・・

「泣かないでー??」

優しくしてアゲルカラ

すぐ、この快感の虜になるよー」

渉の奇妙な笑い声が部屋に響く

「文也あ ツ!!!!」

ド
ン
ッ
!!
!!
!!
!!
!!

「?!！」

「渉ーお前やってくれんじゃん・・・」

目の前には、息を切らした文也の姿

「文也……!!」

「涉
ツ
!!!」

「歯あ食いしばれっ！！！」

そういつて渉の腹部に文也が怒りをこめて一撃を食らわす

「うっ……！！！！」

渉の口から、赤い液体が飛び出した

「文也っ！！！」

歩は、涙をいっばいにしながら叫ぶ

「馬鹿っ！！」

俺が来なかったらお前コイツにやられてたんだぞ？！！！！」

「ごめんなさい……」

歩は、シヨボンと文也を見る

「だから、ほっとけねんだよ……／／／」

「え……？？」

「今日から、お前を一から教育してやるッ！！！」

「え／／」

「まず、夜は激しくなるから体力つけとかねーとな！」

「ヘッ？！！／／／」

「ほら、家に帰るぞ……………」

「うんっ！…」

そう言って歩は文也の手を取ると

この手だけは、一生離さない

と心に決めたのだった

番外編

あれから、6年……

「歩早くしろよっ!!」

「待つてよ文也!!」

「行くぞッ」

2人で開けたドアの先には……

「おめでとう歩と時田!!」

そこには、もうすっかり大人になり、
一児の母となった美奈の姿……

そしてその隣には、相変わらず何年たっても変わらずテンションの

高いタクヤの姿

そう美奈とタクヤは、1年前結婚したのだ・・・

そして、アタシたちはとゆうと・・・

「花嫁姿とっても綺麗よ歩・・・」

涙ぐむお母さんと

隣でお母さんの肩を支えているお義父さんの姿

あれから、私達はお義父さんとお母さんに全てを話した・・・

すると

『文也と歩が凄く悩んだ末決めた決断なら』

とお義父さんお母さんは、アタシたちの為に籍をいれなくておいてくれた

小さな小さな森の教会でアタシたちは
夫婦となった

ふりかえると、6年間色々な事があった

些細な事で喧嘩したり

学校でアタシたちが兄弟とバレて問題になったり

文也の浮気疑惑まででた

でも、最後には必ずどちらかが、半泣きになりながらも謝って
次の日には、仲直りしていた

これから、なにがあるか分からない

でも、2人なら何でもできる気がした

その翌年には可愛らしい女の子ができた

その子の名前は、文也と歩が始めてあつた雪道から

ユキと名づけられた

「ユキー

もうそろそろ、帰るわよー!」

「ママっ

「ユキ転ぶなよー」

後ろには、すっかり親馬鹿になってしまった文也の姿

「うっ

パパさむいよあ・・・

「ユキふゆはきらいっ」

「パパは、冬好きだよ？」

あの頃と変わらない笑顔で優しく微笑む文也

「おんも、さむいさむいなのに??」

「ママと会ったのもこんな冬だし
ユキが生まれたのも冬だからね
パパにとって冬の思い出は一番キラキラ輝いているんだ」

「ふゝん」

ユキは歩と文也の顔を交互に見た

「それに……」

そう言つて文也は歩の手を握る

「こうやって寒いのを理由にして、

いつまでもママにくっついていられるからね」

歩は、昔のように顔を赤らめた

「ママずるい

ユキもパパとおててつなぐー!!」

歩と文也は、何年たっても、何十年たっても

2人仲良く手を繋ぎながら、雪景色の中を歩いていた

あとがき

兄弟だから、

恋をしてはイケナイ

なんて決まりはどこにもない……

実際アタシもそうです……

歩のような恋をしています

でも、絶対叶わない恋なんて無いと思っています

綺麗事とか、そうゆう訳じゃなくて

叶わない

叶う

貴方が好きな人だって

人間です

もし、振られたとしても

人は、誰でも心変わりがあります

だから

たとえば貴方の好きな人が

本来恋をしてはいけない人だとしても

貴方は、諦める必要なんてない・・・

そもそも、恋をしては、イケナイ人なんて
この世には、絶対イナイ

だから、歩のような思いをしている女性に

あたしは、心から頑張って幸せになって欲しいと

心から思っているし

アタシ自身も
頑張ろうと思います

どんな壁が
あろうとも

貴方が

貴方の好きな人を想う気持ちが本当のモノなら

乗り越えられるから

歩だつて

文也だつて

結婚をするまでに色々な困難がありました

これは、

実話です

アタシ自身の話では、無いけれど

義理の兄弟で

3年間親に隠していきながらも

愛し合っている

兄弟がいます

その関係がバレルのも

時間の問題だとアタシは思いますが

本当にお互い大好きで

けど、みんなに認められる事は無くて・・・

そんな兄弟を見ていて

この小説を書こうとアタシは思いました

歩と文也も

その兄弟も

貴方と貴方の好きな人も・・・

一生幸せに

ずっと一緒に居られるよう

アタシは応援しています・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3510d/>

雪景色

2011年1月12日14時25分発行